

命のごはん

亘理町立逢隈小学校 5年 石垣 誠

ぼくにとって、一生わすれることのできないごはんがあります。それは、がんセンターの病室で、父と、母と、ぼくの3人で食べたおにぎりです。

重い病気だった父は、薬のえいきょうで、はきけがひどくなりました。それで、病院のごはんが食べられませんでした。

ぼくと母は、おにぎり大作戦を計画しました。それは、小さな一口おにぎりを作って病院にとどけることです。病室のゆかにしきものをしいて、ピクニックみたいにすわって、3人で食べました。

父は

「うまいなあ。」

と言いながら、この一口おにぎりを、ゆっくりとかんで食べていました。家族で食べたおにぎりの味は、なぜか格別においしかったです。

白衣を着たお医者さんと、かんごしさんが来て、

「家族で楽しそうですね。」

と言いました。そして、みんなで笑いました。

ぼくは、父に負けなくらいおにぎりを食べました。ぼくは、おにぎり大作戦が、楽しくてしかたがありませんでした。

ぼくと母は、しばらくの間、おにぎり大作戦を続けました。

当時、まだ小さかったぼくですが、父がおにぎりを喜んで食べたすがたは、まるで昨日のことに覚えています。今思うと、あの一口おにぎりで、父は命をつないでいたと思います。ぼくは、5年生になって、ごはんと命はつながっていると、気がつきました。

父は天国に行きました。ぼくにとって、言葉にできないほど悲しくて、つらい出来事でした。

でも、ぼくには、おにぎり大作戦の思い出があります。それは、家族の楽しいひとときでした。

きっと、父も、ぼくと同じ気持ちだったと思います。病気とたたかうのは、つらかったと思います。でも、父は、一口おにぎりを食べて、がんばったと思います。父と母とぼくの3人が少しでも長く、いっしょにいられますようにと願ってがんばったと思います。

ぼくにとって、おにぎり大作戦は、命のごはんの思い出です。

ぼくは、毎日あたりまえのように、ごはんを食べています。ごはんのおかげで元気もりもりです。毎日、おいしくごはんが食べられるぼくは、とても幸せだと思います。

これから、ぼくは、ごはんが食べられることに感しゃして、生きていきたいと思います。